



橋

トンジャチナ

筑波大学 人間総合科学研究群 修士 1年 全家存

「世界中ごまんと国なんてあるのに、どうしてよりもよって日本なんだ？」
父は烈火の如く怒る。

「うむ、なぜ日本なんだ？」私は自問する。物理的には、北京と東京ならばたつた三時間の航路、なのに心理的には、中日間の溝は深くて広い。実際この私も、以前は大多数の中国人同様反日感情さえ抱いていた。が、年古る毎に溝の底の厚く堅い氷は解けていったようだ。ふと、日本映画を観、歌を聴き、本まで読んで、笑って泣いて、更に職場では日本のTV番組を参考にし、何だかよく分からないまま、いつの間にか私は日本に惹かれていく。

来日間際の空港で、父の姿は最後まで現れなかった。「やつぱり中日の溝はまだまだ深い」と母に言って、搭乗口に入る。

来日直後の生活は辛い。道に迷うわ、自転車失くすわ、引越作業は自分だけだわ、「これが本当の日本なのか？」と徐々に冷める心。でも、道案内を受けるたび、日本語学校で毎日元気に挨拶を交わすたび、アパートのおばさんの「おかえり」を聞いたたび、「これが本当の日本だ！」と心が温まっていく。そんな普段の生活を両親に報告し続けた。初めは母しか返信をくれなかったが、次第に父もまた「いいね」だけはくれ始めた様子、また母曰く、父は日本のニュースも見始めたとのこと。そして、日本語特訓を毎日してくれる学外の日本人のことを伝えた時、「そんな人もいるのか、礼を言わねば」と父は返信してきた。大学院進学後、思いきって両親にも訪日を勧めた。父にはすぐ断られると思った。が、沈黙の後聞こえたのは「ぜひとも行ってみたいものだ！」。

その瞬間、溝の上に橋が架かった。橋とは、道無きところに人の手できり上げる、新たな道。氷は解けても溝が埋まるわけではない。しかしながら、父子の間のごく小さなものとはいえ、今また一つ確実に、新たな橋は通っている。